

不登校生徒に対する友達の援助の有効性^{註1}

— 女子中学生の「つながり」をめぐって —

内 田 利 広 ・ 大 内 啓 三

(京都教育大学)

(長岡京市立長岡第三中学校)

The effectiveness of the support from friends for a student with school refusal
— Concerning the “relationship” between junior high school girl students —

Toshihiro UCHIDA, Keizo OHUCHI

1999年9月30日受理

抄録：本論においては、まずはじめにこれまでの不登校の要因に関する研究を概観し、その中で学校教師が担任として活用できる援助について考えるため、学校現場と臨床現場の違いについて検討した。

不登校生徒に対する学校現場として有効な関わりとして、「友だちの援助」ということに注目し、その具体例を2事例提示した。その事例を通して見えてきたのは、思春期といわれる中学生、特に女子生徒にとっての友だちのもつ意味であり、友だち関係に悩み不登校を起こす生徒の特長として、「孤立感」と「周りからの視線」について考察を行った。

最後に不登校生徒に対する、友だちの援助における「つながり」の重要性を指摘し、教師のおこなう具体的な援助の技法について、その時期や援助できる友だちの特長の側面から述べた。

キーワード：不登校、学校現場、友だちの援助、つながり

はじめに

本論は、不登校の中学生に対し、学校復帰への援助をどのように行ったらよいかについて、学校現場において、教師という立場からどのようなことが可能であるかについて述べたものである。

不登校については、これまで多くの研究や事例報告が行われてきた。その多くが相談専門機関や心理臨床の専門家のものであり、その心理臨床的な理解や援助の技法などが検討されてきた。しかし、それは必ずしも学校現場においてすぐに活用できるものではなかったりする。筆者の一人（大内）は、これまで中学校教師として、担任あるいは生徒指導・教育相談担当を通して、多くの不登校生徒に関わってきたが、その中でより多くの教師が学校現場において活用できる方法はないかと模索してきた。その体験の中で、本論で述べる「友達の援助」ということに注目し、事例を通してその有効性と意味について検討した。

問題と目的

1 不登校の原因について

不登校に関する研究はこれまで数多くなされてきている。「不登校はなぜ起こるのか」「子どもが不登校になる心のメカニズムはどうなっているのか」「不登校生徒と家族の関係は?」「学校現場に問題はないのか」「社会的な背景は」などの問いに対しては多くの研究者や臨床家により、一定の答えは出されてきたように思う。

不登校児童生徒の心理機制については、主に幼稚園児から小学校低学年に現れる不登校を対象に考えられた「母子分離不安」説(鷺見, 1960)、自己を過大評価し、非現実的な自己像を持っているため、現実の学校状況で脅威にさらされ、不安を感じ、自己愛的な自己像を維持できなくなり学校状況から待避していく「拡大された自我」説(レーベンタールら, 1964)、つらさに耐える気持ちを養おうとしない環境の中で、自我が未成熟なまま年齢を加えた「自我の未成熟」説(平井, 1966)の3つの説が有力である。

家族の関係については、親の過保護・過干渉(小泉, 1988)や親子や友人との希薄な人間関係(松本, 1996)、夫婦間の不仲(中村, 1990)、父親の存在感の薄さ(高木, 1984)などが不登校の原因であると言われている。

学校での原因は要因と見なされることが多く、それには友人関係の問題が半数を占めている。これほど多くの不登校が生まれるのは社会的な背景もあるとされ、家族の核家族化、学校教育の普及、学校教育の序列化、画一化などが指摘されている。このように不登校の原因に関してはかなり明らかになっており、基本的な原因は家族関係、特に母子関係にあるというのが一般的な考え方である。しかし、学校現場から不登校の姿を見る時、臨床現場で導かれた原因が見えにくいのである。この見えにくさは、これからの教育相談、不登校生徒の理解にとって重要な問題であり、これが単に教員の力量の不足だということならさらに研修をとということになるが、現実にはそうではなく、お互いのスタンス・立場の違いということが大きいのではないかと考えられる。

つまり、不登校生徒への関わり・援助を考えると、このスタンスの違い、視点の違いを踏まえた上で考えていかなければならないということになり、特に学校現場において、担任として不登校生徒に関わっていく場合には、教師にとって見えやすいもので、扱いやすいものを取り扱っていく方法を考えていく必要がある。そこで、次にその違いについて詳しく検討していく。

2 学校現場と臨床現場の違い

不登校の基本的な原因(家族や母子関係の問題)が、学校現場において臨床現場ほど「見えてこない」理由は2つ考えられる。1つの理由は、教師は親や生徒と臨床現場ほど深く関われないからである。教師がカウンセラーの役割を担うことには限界がある(長坂, 1998)。2つめの理由は、登校できている生徒の親の姿を見ているからである。不登校の原因である家族関係や母子関係の問題は不登校生徒に限ったことではなく、登校できている家庭にもあるからである。

このように、教育現場においては、不登校の「基本的な原因(家族関係、母子関係)」がな

かなか「見えてこない」。しかし、その反面、不登校を理解する上で重要なことが見えてくる。臨床現場ではなかなか見えない、教師でこそ見えるものがあるのである。その1つは、「不登校生徒の実態」である。臨床現場（大学や病院や相談機関）には不登校生徒のすべての生徒が訪れるわけではなく、また、深刻な状態になってから訪問する場合が多い。学校現場では、すべての不登校生徒（もちろん、その学校の中だけだが）の姿が見え、また、欠席が増えだす初期の様子も見えるのである。

次に見えるものは、「登校している生徒の姿」である。つまり、多くの生徒がなぜ登校しているのかが見えるのである。中学生の学校での1番の楽しみは「友達との会話」である。これは多くの調査（小谷，1992）でも明らかになっている。中学生は、義務感だけで登校しているのではなく、意義や楽しみをみつけて登校しているのである。多くの中学生が学校に登校しているのは「友達」がいるからなのである。

学校現場で見える3つめは、「不登校生徒と他の生徒の人間関係」である。不登校生徒本人と周りの生徒の間にどのような関係があったのか。また、不登校生徒本人は周りの生徒に対してどのような思いを持っているのか、ということは臨床現場でも分かる。しかし、周りの生徒から見ると不登校生徒との関係や不登校生徒に対する思いは、教育現場の教師しか探ることはできない。周りの生徒からの情報は、不登校生徒との人間関係を理解する上で重要なことであり、それが不登校生徒に対する援助をよりの確にすると考える。このように学校現場では、臨床現場では見れないこと、探れないことが、見れたり探れたりすることがある。

最近、多くの教師が不登校について学習をし、研修を受け、不登校についての理解は深まってきた。昔は不登校を「怠け」や「さぼり」と考えていた教師も多くいたが、現在ではそのように考える教師は少ない。しかし、不登校の理解が進む反面、「不登校の原因は母子関係、家族関係にある」と、すべての不登校を家庭の問題にし、学校でのその生徒の姿に重きをおかない教師が増えてきているようにも感じる。教師はもっと学校現場からの視点に重点を置き、不登校生徒の理解や援助の方法を考えるべきではないだろうか。

3 学校現場で見えてくる不登校生徒の姿と援助の方法

中学校で不登校になる生徒には、多様な不登校の姿がある。しかし、学校での姿に重点を置いて見てみると、「友達がほとんどいない」、「まわりの生徒に気を使い過ぎ」、「内気で引っ込み思案」、「まじめで完全主義者」、「情緒的に未熟でわがまま」など、友人がほとんどいない生徒や友人関係が対等でない生徒、偽りの友人関係を結んでいる生徒など、友人関係を結ぶのが不得手な生徒の姿が多く見られる。また、友人関係のトラブルで不登校になる生徒も多い。このように学校現場で見えてくる不登校の生徒の姿は「対人関係」に問題がある生徒が多い。臨床現場ではこの「対人関係」の問題の解決を、カウンセリングによって生じる自己の変革（心理的成長）や母子関係や家族関係の改善に求める場合が多い。しかし、学校現場の教師は、教師と親という構造上の問題や臨床心理士や精神科医のような高い専門性に欠けることから、この方法での解決は難しい。

では、教師はこの「対人関係」の問題の援助はどのようにおこなっているのだろうか。登校している生徒に対する対人関係の問題に対する援助・指導はよく行われている。クラス内の人

間関係の把握に努める、いじめやいやがらせの指導、友達間のトラブルの指導、孤立傾向の生徒に気を配る、班の構成メンバーを考える、生徒同士の活動を増やす、自分の長所・欠点を見つめさせる、リーダー的生徒に援助してもらう、他人を思いやる雰囲気クラス内につくる、など様々な取り組みがおこなわれている。

ところが、不登校の状態になると、このような対人関係の問題に関する援助はあまり重視されないようである。不登校の状態になると、教師も不登校生徒自身の未熟な部分が成長するのを待つことや、母子関係や親が変わることが一番大切なことであり、友人関係を確立することや、クラスの仲間の援助は二次的な援助として位置付けていることが多い。しかし、登校できている生徒、登校できていない生徒にかかわらず、「友達」は思春期を迎えた中学生にとって、掛け替えのないものであり、この「友達」を抜きにして、中学生の不登校生徒の援助は考えられないのである。友達関係を確立することや、友達の援助は二次的なものでなく、自我の成熟を待つことや母子関係が変化すると同様、あるいはそれ以上に大切な援助であると思うのである。

そこで、本研究では不登校生徒について、友達の重要性、友達関係の悩み、友達の援助の意味、友達の援助の方法について考察をおこない、いかに不登校生徒にとって友達の援助が有効であるのかを、2つの女子生徒の事例を通して検討したい。なお、この事例は筆者の一人が担任としてではなく、生徒指導主任として関わった事例である。

事例の提示

1 事例1

A子、中学校1年生であり、性格はぶっきらぼうで、相手の気持ちを考えずにものを言う。体育系クラブに所属していたがあまり積極的には参加していない。学力は普通の上。友達はクラスの中のB子とC子。いつも3人で行動していた（3人は同じクラブ）。特にB子とは家が隣で小学校の時からいつも一緒。毎朝、B子、C子がA子を呼びに行き、3人で登校してくる。

1年生の2学期にA子とB子との関係が悪くなり、文化祭後登校しない日が多くなる。原因はA子の言動がきっかけのように思われたが本当のところはわからない。3者間の友達関係であったが、B子とC子が接近し、A子は孤立する。そして、不登校になる。担任は、B子からの情報で、友達関係が不登校の原因であることが明らかになった。それは、電話や家庭訪問で、徐々にではあるが、A子の思いが担任に話されるようになったからである。A子はB子よりもC子に対する思いが強いこと、朝、B子と一緒に登校するとC子と一緒にいけるから、などが分かってきた。しかし、B子との関係が悪くなったこと。今、B子に対してどういう思いを持っているかなどは語られなかった。

その後の関わりの中で、A子にB子の思いが伝えられた。本心を聞かされたA子はかなりショックを受けたようで、翌日から1週間ほど休む。母親からは、「もう少し様子を見てからにしてほしかった」と残念な思いが述べられた。教師側も「やはり性急であった」「B子の思いは告げるべきでなかった」という反省がでる。その後も担任は連日家庭訪問を続けるが、テスト中は数日登校するが、その後また不登校となり、欠席が続く。その頃A子は「B子へのこだわりはないが、学校で一人でぼつんとしている時があるのがつらい」ともらす。教師団はA子とB

子との修復は難しいと判断し、A子に新しい友達関係をつくることを勧める。たまたま登校した日に、B子、C子と3人で登校はしているが、クラスでは、T子、S子と一緒に行動しているところを担当が見かけ、その後担当がT子、S子を呼んでこれからもA子のことを気にかけてほしいと頼む。二人とも事情を分かっているようで、快く引き受けてくれる。さらに、ある日の放課後、クラスに残っている生徒に誰かA子にプリントを届けてくれないかと声をかけると、P子が引き受けてくれ、これまでもP子は何回かプリントを持っていつてくれていた。その後もしばらくは、B子、C子と3人で登校していたが、学校ではその二人と離れ、T子、S子らと一緒に行動するようになる。それからしばらくしたある日、B子、C子ではなく、T子、S子らと登校する。担任より話を聞くと、前日A子の口から、これからは一緒に行かないということをB子に伝えたということであった。その後は、クラスに新しい友達関係ができ、A子は際び登校が続くようになり、2年になっても元気に登校するようになった。

2 事例2

F子は中学1年生である。朗らかだが、自分から相手に話しかけることはあまりない。学力は中の下。クラブは体育系クラブだったが、2学期に退部。姉（中学3年生）がおり、その姉は小学校6年生から不登校になり、中学校で3年生の2学期まで全欠の状態であった。F子は小学校の時も不登校になっており、母親によると、担任の先生が友人に体罰を加え、そのことがきっかけとなり不登校になったらしい。

中学生になり1学期は元気に登校していた。夏休みになり、「クラブの練習がきつい」ということで、クラブを休みだす。2学期、不登校になる。原因は「クラブをやめることで友達（クラスの友達は同じクラブ）がどう思うのが心配、みんな一生懸命に練習しているのに、私だけ・・・それにクラブ辞めたら友達がいなくなって独りぼっちになってしまう」ということであった。そこでまず、F子に「自分がクラブを辞めてもY子、G子は友達でいてくれる」ということを実感として分かるようにしていった。担任はY子、G子にF子が学校を休んでいる理由を説明し、F子に関わってほしいと依頼する。二人は気持ちよく引き受けてくれる。学校の帰りにF子の家に寄ったり、手紙を出したりした。しかし二人が家に寄ってもF子は家から出てこないことが多かった。そこで担任は休日に誘いだしてみてもどうかと提案し、二人がF子を誘うと、この誘いにのってF子は数回近所で一緒に遊ぶことができ、またそれに同じクラスの同じ班になった生徒二人も参加した。この友達との遊びの中で、友人との関係が切れてしまうのではないかと不安はなくなるが、今度は長い間休んでいるのでクラスの人がどう思うか心配で学校にはまだ登校できないということであった。その頃クラスの中でF子のが話題となり、クラス全体でF子にどう関わっていくかということが話し合われ、学校にはまだ来れないということで、ちょうどその時予定されていた校外学習があり、それにF子を誘おうということになった。F子もこの話を聞いて、当日の朝まで行こうかどうしようか迷っていたが、結局行けなかった。しかし、このことを通して、クラスみんなが自分を受け入れていることを感じ取り、またクラスの中でもF子に対する意識が高まった。

その後、担任は中間テストに向け、1週間毎日F子の家を訪問し、勉強を教える。その結果、F子はテスト当日に、学校に登校し、保健室ではあるがテストを受ける。約1ヶ月ぶりの登校

であった。この日も休み時間には、クラスの友達が保健室に行って、登校できたことをF子と一緒に喜び合った。テスト後はまた登校できなかったが、テスト終了後3日目に再び登校してくる。その後は2、3日休んでは、2、3日登校するというのを数回繰り返し、15日連続で登校してからは、比較的順調に登校できるようになった。F子の友達関係は、クラスで同じ班になった子を中心に広がっていき、クラブもその友人と一緒に別の体育会系クラブに入る。以後、ほぼ安定して登校していった。

考 察

1 不登校生徒にとっての友達の重要性

前述の通り、多くの中学生は休憩時間での友人との語らいや、クラブ活動で友達と一緒に汗を流したりすることを楽しみに学校に来ている。極端な言い方をすれば、「友達がいるから学校にきている」のである。このことは、不登校に陥る生徒でも同じであろう。この2つの事例からもそのことはよく分かる。事例1の生徒は、仲の良い友達関係が崩れ不登校になる。そして、今までの友達関係を解消する決意をし、そしてクラス内で新しい友達関係を結ぶことができるのを確認し、登校できるようになる。事例2では、クラブ活動が体力的に続かずやめようと思うが、友達のことが気になり悩む。そして、友達の関わりで友達関係が崩れないのを知ることが、今度はクラスのことが気になる。しかし、友達の誘いや担任の働きかけで登校できるようになる。

この2つの事例のように、友達関係がきっかけになり、そして友達のおかげで登校できるようになることは多い。それほど、友達の力は大きいのである。友達関係は大きな悩みをもたらす脅威的なものであると同時に、つらいことも乗り越えていける大きな支えにもなるのである。現に、多くの不登校の生徒（誘因が友達関係のトラブル以外の生徒でも）が再登校する時は、何らかの友達の援助を用いていることが多い。

2 友達関係に悩み不登校を起こす生徒とは

(1) 女子特有の友達関係

では、どのような生徒が友達関係を大きな悩みとを感じるのであろうか。事例から見てみよう。事例1の生徒は、ぶっきらぼうで、相手の気持ちを考えないという性格。学力は普通の上。友達関係は3人組でいつも3人一緒。クラスもクラブも同じ。事例2の生徒は、朗らかだが他人に対しては積極的ではない。学力は中の下。仲の良い友達はクラスの中で3人おり、その中で2人はクラブでも同じである。この2つの事例の生徒に関する情報は限られたものではあるが、友達関係について2人の不登校生徒に共通することは、「女子」で「友達が2、3人」おり「固定化」しているということである。このことは、女子の友達関係の特徴でもある。つまり、この2つの事例は、女子中学生の友人関係の特徴が良く表された不登校事例と言えるかもしれない。

中学生の女子の友人関係の特徴としては、「特定の友達関係で、排他的」ということが上げられる。尾木(1991)も「ベツタリ、バツサリの友達関係」(仲がいいときはいつも一緒にいてベツタリしているが、一度関係が崩れてしまうとバツサリと切っていく)という言葉を使い、

「私的グループの固定化現象には激しいものがある」と中学生女子の友達関係の特徴を述べている。この特徴を見ると結び付きが強固のように感じられるが実はそうではなく、薄っぺらなことが多い。また結構トラブルも多い。特に女子3人の友達関係ではトラブルが良く起こるようである。

(2) 孤立を感じる生徒

3者間の友達関係以外の生徒でも友達関係に悩み、不登校に陥るため、前述の説明だけでは不十分である。結論からいうと「友達関係で悩み、不登校になる生徒」というのは、2つのタイプが考えられ、1つは「友達関係を結びたい」と思い、「この友達がなくなると、他の人とはもう誰とも友達になれない」、「友達がなくなると、学校で孤立してしまう」と思う生徒である。

よく孤立している生徒（友達がいない生徒）が対人関係をうまく結べなくて不登校に陥ると思われがちであるが、案外そうではない。完全に孤立している生徒は孤立することに悩んでいなかったり、あるいは孤立を好んでいる場合（あくまでも外から見た印象として）があるからである。つまり、友達関係を結ぶ欲求はあるが、特定の人としか結べなく、それがないと学校で孤立した感じや存在する意味を感じられなくなる生徒が、友達関係に悩み不登校になると考えられる。そして、この孤立感は中学生女子には耐えがたいものなのであろう。事例1でA子が不登校に陥ったのも、B子、C子と別の班になり、「私だけひとりぼっち」という感覚を強く感じたからであろう。さらに、同じ班で一緒に楽しく話をしているB子とC子の姿を見て、その感覚が増幅されたと思われる。そして、その孤独感、孤立感、疎外感に耐えられなくなり登校を拒否したと思われる。

(3) 友達の自分を見る目が気になる生徒

友達関係に悩み不登校を起こす生徒の2つめのタイプは、性格的には繊細で、常に「相手が自分のことをどう思っているのか」を気にしている生徒である。「自分の言動が友達を傷つけていないか」、「こんなことを言ったら、友達に嫌われないだろうか」ということを考えている生徒である。そして、そのことが気になり、悩み、耐えられなくなり学校から逃避してしまうのである。実はこの不安は、程度の差はあるが、多くの中学生女子が持っているものであると思われる。

事例2の生徒はこのタイプである。F子は担任に不登校の理由を「クラブをやめたら友達にどう思われるかが気になる。みんな一生懸命に練習しているのに、私だけ・・・」と述べている。F子は怠け心から「しんどい」といってクラブを辞めるのではない。体力的についていけないだけである。しかし、怠け心から辞めるのではないが、他の友達がその苦しさに打ち勝ち、一生懸命練習していることを考えると、「私だけ・・・」と自分を責めてしまうのである。そして、「友達は途中でギブアップしてしまった私を『だめな人、弱い人』と思うかもしれない」と思い、「これで嫌われてしまうのではないかと不安になったのである。そして、この自分に対する友達の思いが計り得ないために不安はつり、ついにその不安の重圧に耐えられず、学校に行けなくなる。F子の不登校はこのように考えられるだろう。

以上述べたように友達関係に悩み不登校を起こす生徒のタイプは「友達関係が壊れることで孤立感を感じるタイプ」と「友達の自分を見る目が過度に気になるタイプ」があると思う。また、この2つのタイプははっきりと区別できるわけではなく、両方の特徴を持っている場合が多い。そして、この2つのタイプの心理は、不登校を引き起こす生徒以外でも持っている心理であることは、中学校現場の教師ならば理解していただけたと思う。つまり、現在の中学生、特に女子中学生は友達関係で悩み、不登校になる可能性を誰でもが秘めているということである。

3 不登校生徒に対する友達の援助の意味

(1) 友達の役割

不登校生徒に対しての友達の援助とはどのような意味があるのか、について述べる前に、まず中学生における友達とは一般的にどのような役割があるのか、ということについて検討してみたい。

松井(1996)は、友人関係が青年期の社会化に大きな影響を及ぼすとし、その社会化に果たす機能を次の3つを述べている。第1の機能は「安定化」の機能である。青年にとって友人は、自分が抱えた悩みを聴き、相談にのってくれる相手である。友人に自分の内面を話すことは、不安や心理的な問題を解決したり、軽減するよい助けになる。また、直接的に話を聞かなくても、一緒に遊んだり、趣味の活動をともに行うことを通して、友人は青年が感じている悩みを和らげ、心にゆとりをもたらし、ストレスに耐える原動力を与えてくれる。精神的安定をもたらすことによって、友人は青年の自我を支え、青年が社会の成員となることを促している。

第2の機能は、「社会的スキルの学習」である。友人は家族のように親しい存在であるが、家族のように甘えることはふつう許されない。青年は友人とのつきあいを通して、家族以外の他人とどのように接するべきかという知識を身につけ、人とかかわる能力を高めていく。

第3の機能は、「モデル機能」である。友人に対して青年は、その行動や考えを模倣し、友人を生き方の手本とするようになる。

このように松井は青年期の友人の機能について述べているが、これは思春期(中学生)の友人の機能と考えてもよいだろう。この安定化の機能、社会的スキルの学習、モデル機能はそれぞれ中学生にとって大切な機能であるが、いま中学生が一番必要なもの、欲しているものは第1の「安定化」の機能ではないだろうか。対人関係に敏感になり、つねに孤立しないかと不安になっている中学生にとって必要なものは「安心できる友人関係」なのである。そして、松井も述べているように、「安心できる友人関係」が「心にゆとりをもたらし、ストレスに耐える原動力を与えてくれる」のである。つまり、安心できる友人関係があれば、学校で生じる不安や悩みにも耐えられ、そして癒され、登校できるのである。逆に考えれば、不登校生徒がこの安心できる友人関係が樹立できれば、あるいはこの安心できる人間関係が築けそうだと感じた時は、再び登校しようとする力が湧いてくるのではないか。そして、この「安心できる友人関係」の樹立は、教師や親の援助はもちろんだが、友達の援助なしには不可能なのである。

(2) 事例からみる友達の援助の意味

事例1では、A子は3人の友人関係でトラブルが起こり不登校になる。そして教師からトラブル相手(B子)の気持ちを聞かされ、今までの友達ではなく新しい友達を見つけようとする。

この時、A子は「B子へのこだわりはないが、学校で1人ポツンとしている時があるのがつらい」と述べている。A子は学校での「孤立感」がたまらないのである。その後、A子は登校できるようになるが、その原因はA子が「あたらしい友達関係を築ける」と確信したことである。11月下旬に登校した時、T子・S子という今まで親しくなかったクラスメイトと一緒に行動できる。12月、久しぶりに登校した時も、T子・S子と一緒に行動できる。このT子・S子と2日間、クラスのなかで一緒に行動できたことで「私はクラスでは一人ぼっちにはならない」という思いを強く持ったのである。そして、このことが感じられ、確かめられたため、今までの友達に「これからは一緒に行かない」と別れを告げることができたのである。A子にT子・S子という新しい友達の出現がなければ、おそらく不登校の状態はもっと長く続いていたかもしれない。また、B子との関係を絶つことも時間がかかっていたであろうし、もっと悩み苦しんでいたかもしれない。

事例2を見てみよう。F子は体育系クラブに所属するが練習がきついことから、クラブを休みがちになり退部を決意する。しかし、友達の目が気になり、悩み、不登校になる。この時、担任はF子がクラブをやめても友達関係は崩れない、ということをつからせるために、クラスの友達4人と一緒に遊んでもらうことを計画し、実行する。このことにより、F子は「友達私のことを悪く思っていない」ということを確認する。しかし、今度は「クラスみんながどう思っているのか気になる」のである。F子は特定の人に抱いた「私のことをどう思っているのだろうか」という感情が、全体の人(ここではクラスのみんな)に対する感情へと広がっているようである。今度はクラス全体でのF子への関わりを計画するが成功しない。その後、担任が家庭訪問を行い、テストにむけての勉強を1週間毎日教える。この担任の援助もあり、テスト当日は学校に登校できる。ただし、教室には入れず、保健室でテストを受ける。しかし、この日、クラスの多くの者が休み時間に保健室に行き、F子に話しかける。そして、F子が登校したことを喜び合う。このことがF子の心の中に変化を起こしたと思われる。つまり「クラスのみんなも私のことを悪く思っていない」ということが分かり、登校する力が徐々に沸いてきたのではないだろうか。4人の友達との休日の遊び、そしてクラス全体の取り組みが、F子の対人関係の過敏さ・不安感を和らげ、対人関係に自信が持てるようになったと考えられる。

これまでの不登校生徒に対する友達の援助は、どちらかというと「友達を使って登校させる」というように、単なる登校刺激の一つとしての考え方が多かった。しかし、2つの事例からも分かるように、中学校の不登校生徒にとって友達の援助とはそのようなものではなく、学校での孤立感や対人関係の過敏さを癒す原動力なのである。不登校生徒に対しての友達の援助は「登校するきっかけ」ではなく、「学校で孤立感を感じない」「安心して生活できる」ための大きな支えであり、学校生活での基盤を築くものである。

4 友達の援助における「つながり」の意義

これまで不登校生徒に対する友達の援助の意味について事例にそって考察を行い、その有効

性を述べてきた。ここで、実際に友達の援助を具体的に用いる場合において、いつ、どのような友達に援助をしてもらえばよいのか、ということについて友達との「つながり」をキーワードとして、より一般的な視点から考察を行う。

(1) 不登校の原因を探る時の友達の重要性

友達の援助を用いるとき、その不登校生徒の友人関係やその不登校生徒の周りの生徒に対する思い、そして周りの生徒の不登校生徒に対する思いなど「不登校生徒をめぐる人間関係」について知っていなければ、「友達の援助」は行えない。そこで、友達の援助をいつ、誰にやってもらえばよいかを考える前に、「不登校生徒をめぐる人間関係を知る」ということについて触れたい。

不登校生徒への対応を考えると、まず探らなければならないのは「なぜ、学校に来れなくなったのだろうか」という不登校に陥った理由である。

まず不登校の原因を本人から探る場合の留意点は4つある。1つは、本人の訴える原因に耳を傾けることである。確かに、本人の訴える理由には、「単なるきっかけ（誘因）にすぎない」とか「自分でも分からなく、学校で思い当たることを理由にあげているだけ」という懸念が生じる場合もある。しかし、中学校というのは友人関係をめぐる問題で不登校になる生徒が多く、そしてこの友人関係のトラブルこそが、学校生活の基盤を失う重大なことなのである。このように考える時、本人の訴える理由は無視できないし、教師が積極的に学校での原因を探り、解決する必要性を感じるのである。2つめは、日頃からそれぞれの生徒の友達関係に目を配り、その関係を把握しておくことである。3つめは、生徒が不登校になった時は、まず「友人やクラスメイトの間で何か起こったのではないかと」、友達関係の問題に目を向け、そのことについて対応を図ることである。4つめは、本人が原因をなかなか語らない場合でもあきらめず、聞き出す努力をすることである。もちろん、不登校生徒から原因を聞き出すときには、信頼関係が壊れないように、相手の心情を理解し、相手の様子を伺いながら、気持ちを聞き出す努力が必要である。

この不登校に陥った理由を探る中で、もう一つ明らかになってくるのは、不登校生徒をめぐる人間関係である。つまり、本人が周りの人間関係をどのように捉えているのか、を聞くことにもつながり、当然のことながら、このことは誰に援助してもらうのが適切かということにもつながる。結局、不登校に陥った生徒は周りの友人とのつながりを求めながら、そのつながりが切れていったり、そのつながりを信頼できないでいることが多いのであり、周りとのつながり具合を見ることが、不登校生徒の不登校の背景を知るだけでなく、援助の方向をも示すことになると思われる。

(2) 不登校生徒と他の生徒との関係を知る

事例1では、友達からの情報がA子の不登校を理解することに大いに役だった。前節で述べたように不登校になった生徒は、「なぜ学校にいきたくないのか」を話さない（話せない）場合が多い。その時、親や他の教師や友達やクラスメイトから情報を収集し、その不登校を理解することは大切なことである。特に、中学生は友達関係をめぐる問題で不登校になる場合が多

く、またその友達に関することは大人、特に教師には語られないことが多い。また、不登校生徒本人から友達やクラスメイトに対する思いやその関係について語られたことが、まわりの生徒からの思いや見方とずれていることがある。そして、そのずれを修正することが対人関係の修復に大いに役立つ場合がある。

このように、中学生の不登校の場合、周りの友達やクラスメイトから、不登校生徒の対人関係について聞き出すことは非常に大切なことなのである。そのことがまた、周りの生徒から見た不登校生徒とのつながり具合を理解する一つのポイントとなり、どのような生徒とのつながりを形成していくことが可能であるかの見立てにも役立つと思われる。

(3) 友達の援助の効果的な時期

不登校生徒はある日を境に全く学校に来なくなる、ということはほとんどない。多くの不登校生徒は、徐々に欠席する日が増え、ついには完全な不登校になるのである。この欠席が増えてくる時期（不登校の早期）は、学校に行く力がなくなってきている時期だと思われるが、全くなくなっているわけではない。学校に行く力が残っているから登校できる日があるのである。この残っている学校に行く力の多くは「学校には嫌でも行かなければならない」とか「親が心配するから」という消極的理由の力だと思う。しかし、その力の中には「友達と関係を修復したい」とか「安心した友達関係が作れば」という友達に対する「願い」や「希望」も含まれていると考えられる。そして、この「願い」や「希望」がかなえられたり、あるいはかなえられるかもしれない、という望みが出てくれば、この学校に行く力は増してくるのではないか。

しかし、不登校生徒が学校から完全に離れてしまい、不登校が長期化してしまえば、友達の援助も効果がなくなる。不登校が長期化すれば、本人の心の中の「友達と関係を修復したい」とか「安心した友達関係を作りたい」という願いやこだわりがなくなるからである。あるいは、特定の友人に対しての不安や悩みが、長い時間を経る間に大きく膨らみ、学校そのものに対して拒否する感情が生まれ、友達やクラスメイトをうけつけなくなるからである。いずれにせよ、長期化すればするほど、友達やクラスメイトとのつながりは細いものとなっていき、関わりは困難になるのである。したがって、友達やクラスメイトとの心理的つながりが太い早期の時期に、友達の援助を用いた方がより効果的だと考えられる。

もっとも、不登校が長期化した場合でも、少しずつ回復の兆しを見せ、何とか学校に復帰できそうだというときには友達の援助は重要であることには変わりはない。

(4) 不登校生徒に援助できる友達とは

事例1はA子がB子、C子との関係が切れ、学校で孤立を感じ、不登校になった事例であるが、その孤独感を払拭したのは、T子、S子の出現であった。不登校の早期の時期に登校したとき、T子、S子と休み時間一緒に行動できたことが、A子の登校を続けていく大きな力になった。

T子、S子はどのような生徒なのであろうか。二人とも今まで特にA子と親しい関係にあったわけではない。同じクラスメイトという関係だけであり、二人のA子への関わりは、始めは担任の依頼でも何でもなく、自ら進んで関わって一緒に遊んでくれたのである。二人は休みが

ちなA子のことを心配しており、クラスの中でもA子がB子、C子と離れていっているのを知っていた。「何とかしてあげたい」という優しい気持ちだが、A子との関わりをうんだのである。

T子・S子の2人は、困っている人を「何とかしてあげたい」と思う優しい生徒である。この「優しさ」というのが、不登校生徒を援助する生徒の資質の第1の条件ではないだろうか。援助する生徒の資質には性格が同じことや趣味が同じことよりも、「優しさ」や「その子を思う気持ちの強さ」の方が大切であると考えられる。不登校生徒が孤立感や対人関係に過敏になるのは「私は誰も相手にしてもらえない」とか「相手は自分のことをよく思っていない」というように「相手の思いが自分に向けられていない」あるいは「相手の思いが正しく伝わってこない」、つまり『相手とつながっている』という実感がわからないことが問題なのである。

この相手とのつながりを感じるためには、相手から不登校生徒に向けて「気持ち」や「思い」を積極的に送ってあげなければならない。ただ、性格が同じや趣味が同じだけではこの「気持ち」や「思い」は送れないのである。不登校の状態になると、不登校生徒は自分から相手に向けて思いを発することはなかなかできない。相手と自分の間で「気持ち」のキャッチボールはできないのである。だから援助する友達には「あなたのことを心配していますよ」「大丈夫ですか」というメッセージを常に送れる「優しさ」が必要なのである。

また、不登校生徒が相手の気持ちや思いを感じ取り、相手と「つながっている」という実感を得るには、相手から送られる気持ちが「本当の」思いであることが必要である。「先生に頼まれたから」とか「班長だから」という義務感だけでメッセージを送れば、不登校生徒の心を動かさなければならぬ。逆に友達やクラスメイトに対する心の窓を閉ざすことになるだろう。事例2のF子に関わってくれた友達は、教師に頼まれて動いてくれたのであるが、その心の中には「F子さんを何とかしてあげたい」という「優しさ」が備わっていたと思われる。

教師が生徒に援助を頼む場合には、その生徒がその不登校生徒を「何とかしてあげたい」と思っていることを見極めることが大切である。ここで、忘れてはならないのが、担任の姿勢である。「友達の援助」というと「友達にまかせて教師は何もやらない」と思われそうであるがそうではない。教師の日頃からの実践や生徒との信頼関係、そして教師自身の不登校生徒に対して「何とかしてあげたい」という思いが「友達の援助」をうまく機能させるのである。

おわりに

中学生の不登校には様々な不登校の姿があり、要因も1つだけとは限らない。不登校の1つ1つが違う姿をしているのである。したがって、当然、援助の方法もそれぞれの不登校に応じて考えていかねばならない。中学生の不登校だから、すべて友達関係に問題があると考えたり、その援助にはすべて友達を用いれば良い、というものではない。あくまでも「友達の援助」は教師の不登校生徒に対する取り組みの1つにすぎない。

しかし、「友達の援助」は取り組みのなかの1つにすぎないのではあるが、極めて大切で、有効な援助であることを、多くの教師の人達に認識してほしいのである。

「友達の援助」は、学校での孤立を和らげ、そして対人関係で疲れた心を癒すことができるものである。そしてこの援助は、友人関係が原因（きっかけ）で不登校になった生徒はもちろ

ん、それ以外の不登校生徒にとっても有効な援助となるはずである。なぜなら「友人の存在」が思春期の中学生にとっては、かけがえのないものであり、「他の人とつながっている」という実感がいろいろな障害をも乗り越えていける原動力となるからである。家庭や親子の間で多少の問題があったとしても、勉強やスポーツができなくても、学校で友人との楽しい語らいの場があったり、友人と一緒に活動できる場があれば、「学校に行きたい」と思うのである。

現在、不登校の児童生徒は全国で10万人を越え、今後もさらに増えていく傾向にある。この不登校の生徒たちはみんな悩み苦しんでいるのである。この生徒たちの悩みや苦しみが癒され、楽しく元気に学校生活を送れることは親、教師、友達、そして本人と全ての人の願いであろう。そのためには、この「友達の援助」を通して、少しでもつながりの感覚を持てることが大切であり、担任としていかにこのつながりを作っていくかを検討してきた。それは単に教師が友達を使って働きかけるということではなく、その時期や関係性を十分考慮しながら、不登校生徒と周りの生徒を“つないでいく”という、学校においてはよく見られる、しかし非常に難しい援助活動を実践するということである。そしてそのことにより、一人でも多くの不登校生徒が学校生活を楽しく送れることを願っているのである。

注1) 本論は、平成10年度京都府現職教育職員長期派遣研修として京都教育大学に派遣された大内啓三(現 長岡京市立長岡第三中学校)が、研修報告書として本学に提出したものに、加筆修正をしまとめなおしたものである。

このような研修の機会を与えていただき、ご指導いただいた原純夫先生をはじめ、京都府教育委員会に感謝いたします。

文 献

- 尾木直樹(1991):少女反抗期 学陽書房
- 小谷文和(1992):中学生の登校意識に関する学校心理学的研究 京都教育大学教育実践研究年報 第8号
- 小泉英二(1988):教育相談の立場から見た不登校の問題 児童青年精神医学とその近接領域 第29巻6号
- 高木隆郎(1984):登校拒否と現代社会 児童青年精神医学とその近接領域 第25巻2号
- 中村伸一、デビット・マクギル(1990):家族への介入アプローチ(坂野雄二編「登校拒否・不登校」)同朋舎出版
- 長坂正文(1998):教師カウンセラーの立場から1(「今なぜスクールカウンセラーなのか」氏原寛・村山正治編著 ミネルヴァ書房)
- 平井信義(1966):School phobiaあるいは登校拒否の諸類型と原因考察ならびに治療について 日本臨床心理学会編「臨床心理学の進歩」
- 松井 豊(1996):青年期の友人関係(斉藤誠一編「青年期の人間関係」)培風館
- 松本康儀(1996):人間関係のつまづきと病理(斉藤誠一編「青年期の人間関係」)培風館
- Leventhal, T. and Sills, M. (1964): "Self-image in school phobia" Amer, J. Orthopsychiat.
- 鷺見たえ子他(1960):学校恐怖症の研究 精神衛生研究 第8巻